

紙田彰「Super-string Theory シリーズ」の作品解説 (2007.5)

Super-string Theory シリーズについて

宇宙をイメージするのではなく、宇宙論という思考から触発されたイメージを展開する。

わたしには、生きていく間に次の問題をなんとか知ることにはできないかという根強い思いがある。

それは、人間とは何か、存在とはどういうことか、宇宙はどうなっているのか、という三つのことである。

そして、これらのことを主要なテーマにしてこのシリーズが生まれた。

1) 「人間とは何か」という問題

人間存在においても包含－被包含、つまり詳細化される部分構造の重なりが複層的な入れ子となっている。

その詳細化された部分は、単に全体の一部ではなく、独自性を持っている。

そのような詳細化された部分が発する叫びの集合によって、人間は人間を人間たらしめているに違いないのだ。

このように考えると、おのずから存在の基点という問題に向かわざるをえない。

この基点、モナドの底から累積している叫びこそ、解放衝動と名づけようべきものである。

この解放衝動は、あらゆる全体化に抗い、それぞれの存在の自由を求めている。細胞も、血や肉も、手や足、内臓、神経、脳みそから髪の毛一本さえも、それぞれの意志において。

このような問題を原初的なテーマに据える場合、それは必然的にマチエールの造形と関連していく。キャンバスにおける肉体的行為とその体験として――。

肉体の深奥から立ち上がってくる衝動が、ニードルやナイフやサンドペーパーを選択するのであり、モナドの戦慄が画面の多層化を要求するのであり、マチエールの実在感がそれぞれの存在の証となるのである。

2) 「存在とはどういうことか」という問題

構造としての肉体の詳細化は、その究極において量子論へ到達する。なぜなら、量子論は物質の極小を扱う学問であり、物質の存在について考えること抜きには人間についての探求は不可能だからである。

量子論は量子の重なりと不確定性原理を軸にした理論であるが、マクロでは一つの見え方しかない物質が、ミクロにおいては確率的にしか見えない（存在しない）というものである。

マクロとかミクロということさえ、見る側のポジションによって定義されるスケールやサイズなどの相対的なものである。人間存在はマクロであるとして済ますこともできない。あらゆる存在はミクロの物質による構造体であるからだ。

こうした極小の問題は、さまざまな思考イメージを惹起し、抽象的な表現ばかりではなく、実在としての思考を生み出す原因となるに違いない。

3) 「宇宙はどうなっているのか」という問題

量子論と重力論（相対性理論）は量子重力論という学問によって、宇宙という極大の物質を宇宙の原初、つまり極小のビッグバンを扱うことで統合しようとしている。

その最新の理論である「超ひも理論」によると、物質は極小のひもエネルギーの振動で作られており、このひもはさらに物質の中に多次元を閉じ込めているともされる。

極大の宇宙がそもそも極小のビッグバンから始まっており、サイズや

スケールの問題が相対的だとすると、いまだ宇宙は極小のビッグバンの渦中にあるとも考えられる。

つまり、宇宙がビッグバンという物質の内部にあるとすると、宇宙もまた極大のひもエネルギーに巻きつかれているという逆数の相関があるのかもしれない。

2次元で多次元を表現するのは絵画の不可能性といえるのだろうが、このシリーズでは思考イメージの可能性によって平面を造形し、構成しようとしている。

「Super-string Theory」

2005.7, oil, canvas, F100×5(651.5×162cm)

それぞれの存在、あらゆる存在の解放衝動と超ひも理論の彼方につづく宇宙論的自由とは何かを求めて

第7回展、第8回展で発表した「Super-stringもしくは立ち上がる解放衝動」「White Image」小シリーズで、スクラッチングとひもの埋設、研ぎ出しによる画面造形の方法に、ある方向性を見出すことができた。この手法による大作を企画したのはこの直後である。

それまでの「解放衝動」という思考は、これまでの人間→肉体→細胞→モナドへと向かう存在の下層への探求から生まれたものだが、さらに極小の量子と極大のユニバースがひも理論によって結合するという刺激的な現代物理学に大きく触発されて、「Super-stringシリーズ」を大テーマにすることにした。これは、抑圧と自由の問題である解放衝動とも本質的に連続していると考えられるからだ。

この5枚組の作品においては、極小とは光とひもの波打ちであり、振動であり、極大のユニバースとは空間と時間の大きな変化である。

振動するひも、大きなうねりを持つ巨大なひもを麻、棕櫚縄、綿糸などを下地に埋め込み、大量の絵具を重ねていき、ニードルやナイフでスクラッチングし、サンドペーパーで何度も研ぎだしていく。

ここには、モナド→細胞→肉体の律動という、いわば「解放衝動」の肉体的行為がある。そして、そのことがマチエールの造形に直接結合していくのである。

string（ひも）の全振動は、この解放衝動とキャンバス上で出遭っているのだ。

宇宙はこの存在の律動、肉体の律動とも深く結びついているのだ、という思いがするのである。

「からだを張った」作業において意味を持つものとして、次の点があげられる。

- ・純粋な肉体的行為の繰り返し。
- ・創造行為における原初性の発動。
- ・存在に包含される「それぞれの存在」の解放衝動。

[2005.5.26～7.20にかけてF100号5枚、横6.5メートルの大作を制作。制作過程の写真記録をWEBで公開している。]

「10-44sec.—重力の発生」

2006.11, oil, canvas, F120 x 4(521.2×194.0cm)

2006.10-11の2カ月間、横浜市 BankArt studio NYK での公開制作作品

この作品は、横浜市・BankART Studio NYK で2カ月間(2006.10.1-11.

30)にわたって公開制作したものである。

タイトルの「 10^{-44} sec.」とは時間の最小サイズ(プランク時間)で、ビッグバンから 10^{-44} 秒後に宇宙にある4つの力(強い力、弱い力、電磁気力、重力)のうち、まず重力が発生したというものである。重力はマイクロではもっとも弱い力であるが、マクロではあらゆるものについて無限の距離に力を及ぼすとされる。

F120号4枚組の大作は、じつに 10^{-44} 秒という、瞬間というにはあまりにも小さな、恐るべきサイズをイメージしている。

作品の全体を横に貫いて敷設されたケーブルの痕跡、その盛り上がった絵具のマチエールはひもエネルギーを表し、締めつけられた宇宙の原初がその最初期に重力を発生させ、宇宙の基本的な力を誕生させるという思考イメージで作られている。

力はそれぞれ量子的な存在であり、重力はグラビトン(重力子)という粒子的なイメージを持つ。ビッグバンの周囲には宇宙の時間の範囲を示す楕円のユニバースサークルがあり、マスキングによってできたキャンパスの下地の不定形のいくつかのかたまりは多次元のかたまりのイメージでもある。

またそれらは、絵具の層の重なりを剥き出しにし、平面の多層化を強調している。

キャンパスという布、木枠の露出、包囲するものさされるものあいまいな関係、裏側と表側、回り込むもの、折り込まれるもの、これらは現実との対峙をも含め、曲率を持った時空面が多重化しているという含意でもある。

この作品の中で、作家は作品を創造する行為のうちに実在している。それは、作品との物理的な距離のある関係でいうのではなく、ニードルで刻まれた無数の線のひとつひとつ、切り刻まれることで変質したごつごつした無数の粒状の絵具のかたまりに内在しているのである。

つまり、これらのマチエールは存在の基点のそれぞれから大量に発せられた戦慄する狂乱的な泡でもある。

そして、これらの行為のすべてが 10^{-44} 秒という恐るべき極小の時間に、静かに呑み込まれていくのである。

「転移」1, 2

2007.3, oil, canvas, P20(53.0×72.7cm)

相転移phase transitionとは、ある物質の相が別の姿の相に転ずるということで、超ひも理論の数学ではひもエネルギーで締めつけられた次元空間が別の形態の空間に移行するというものである。

これは、いくつかの超ひもの幾何学や数学が主要なひとつの理論の別の現れであるとするM理論や、ブラックホールからビッグバンが生まれるなどのアイデアに通じるようでもある。

また、見方を変えるということで対象が変化するというだけでなく、物質そのものがおのずから別の物質状態あるいは宇宙相に変化するということをも示唆している。

次元はそもそも理想化されたスケールであるが、「転移1」は、曲率をもった次元が物質の中に突如として生まれた空間が裂けて相転移するときに飛び出したイメージである。4つの力、あるいは4つの次元。フロップ転移(ひも理論の幾何学であるカラビ-ヤウ空間で、空間の相が入れ替わることで空間の破滅を修復する転移)を暗示した、千切れそうなひもエネルギー。

また、「転移2」では、同じ相転移でもまったく形の異なるねじれた管、環のイメージ。視点を同時に合わせることはできないが、同じ物質が同時に異なる位置に存在している。

作品のそれぞれには、裂かれた形のひもが黄色の絵具の底に埋め込まれている。

「Uncertainty Principle」1~4

2007.3, oil, canvas, M6(41.0×24.2cm)

M6号サイズの4点の作品では、珍しくひもは使っていない。

タイトルは量子論における「不確定性原理」である。

カーボンブラックの粉を樹脂で練り込んで、キャンパスに何度か重ね塗りし、研ぎ出し、絨のような艶を出す。下地にはアクリル系の絵具の色点を散らしてある。

S字形に見える図形は相転移をイメージした物質であり、これ自体ひもでもある。銀色をベースに、図形の増加とともに金色で侵蝕の変化をつけてバリエーションとした。重ね合わせと不確定性――。

また、マスキングをはずした下地はぼんやりとしたスリット(切れ目)が光の二重スリット実験を想起させ、量子の世界を印象づける。

「反-次元のかたまり」1~5

2007.3, oil, canvas, F3(22.0×27.3cm)

ひもエネルギーが単純化された配置で、物質と空間を締めつけている。その傍らで次元のかたまりらしきものが物質の部分を垣間見させている。

また、真空の中に匿されている白いのっぺりとした反-次元のイメージは次元のペアである。

「CMB(Cosmic Microwave Background)」1~5

2007.3, oil, canvas, P3(27.3×22.0cm)

宇宙マイクロ波背景放射をテーマにした5点。

ビッグバンから40万年後に宇宙はプラズマ状態を脱し、「宇宙の晴れ上がり」という時期を迎える。この透明で冷えた空間に放射されたマイクロ波(光子)は宇宙全域に及び、この検出がビッグバンと膨張説の証拠とされる。

ひもの曲線のパターンと研ぎ出しによる下層の絵具の斑模様、宇宙膨張によって赤方偏移を受けた光子のイメージでもある。

マスキングで切り抜かれた部分は、匿された次元、露出したこちら側、あちら側。

紙田 彰 (KAMITA, Akira)

〒1340087 東京都江戸川区清新町 1-1-22-105

Tel 03-3686-5915

akamita@naoe-ya.co.jp

www.naoe-ya.co.jp/ryokuji/ (全作品公開)